

## 南方氣象豫報資料 第二輯

# 印度洋及南太平洋に於ける氣塊移動の 平均値に就いて

マニラ中央氣象臺次長 チャールズ・イー・デツベルマン原著

臺北帝國大學 助教授 小笠原和夫 解説

緒論—ヴェーレンスキオルトの著書“北太平洋に於ける氣塊移動の月平均値”<sup>\*</sup>を讀めば、北方及東方から我が比律賓群島に接近し來る氣塊觀念に就き充分なる知識を得ることが出来るのであるが、乍遺憾比律賓群島にとつて極めて重要な南西季節風に就いては充分には判り得ない。著者は、我が比律賓群島の爲に、此の不備を補はんものと、更に印度洋及南太平洋の分につき彼の事業を繼續した。但し、この事業を繼續するに當り變更した點が一つある。それは、彼の採用した、流線圖法に代ふるに大氣移動の風力と方向との兩者を含蓄する風速の合成値を表はすに矢印を以てしたことである。蓋しヴェーレンスキオルト氏圖法に於いては、其の收斂及發散線の多くは、合成氣流値が極めて小さな地方に對しては、實際上何等の意味を爲さず、その上實際上、より重要な流線を蔽ひかくして、その實在印象を誤らしめないとも限らないからである。尙、其の上著者の圖法から流線主方向を求めやうと思へば、合成矢印から容易に演繹し得られる。かくして、南北兩太平洋竝に印度洋に於ける氣塊移動の値が算出されるならば、比律賓群島を中心とする諸氣塊の動きに就いて適切なる諸研究を始めることが出来る。

本表に於いては、ラムベルト公式を用ひず、ヴェーレンスキオルト法を採用することゝした。蓋し氣塊移動に就いては後者は前者に比しより正確な値を表はし、例へば、茲に頻度 50% は北、他の 50% は南に屬し北風の風力はビューフオートの 5 で、南風の風力がビューフオートの 2 であつたとすると風力を考慮に入れない普通の公式では、平均値に於いて北から南への氣塊移動のあつたことが明白であるにもかゝらず、其の合成値は零となるといふ不都合を招來する。ヴェーレンスキオルト法のランベルト法に打ち勝つ重要な點は此處にある。

本圖の目的はも一つある。それは、颱風は一般に赤道前線上に發生するものであることを示さんとしたことで、特に資料の豊富な印度洋の圖によりこれを示さんとした。

諸て是等の圖面を手がかりとして、著者は大要次の如く主張する。即ち

<sup>\*</sup> Geofy. Publik., 第 2 卷 9 號參照。

本解説は拙著南方氣候論（特に雲、霧、降雨及雷發生機構）及び南支那海と比律賓近東西太平洋發生低氣壓及颱風發生機構研究の理解を助くるために不可欠の參考文獻たることを注意に供へる。